

Luigi Foscolo Benedetto

Il Milione: la tradizione manoscritta (2)

ルイージ・フォスコロ・ベネデット
『イル・ミリオネ：写本の伝統』（二）^{1＊）}

(Ch.3 TA・Ch.4 VA・Ch.5 P)

高田英樹 訳

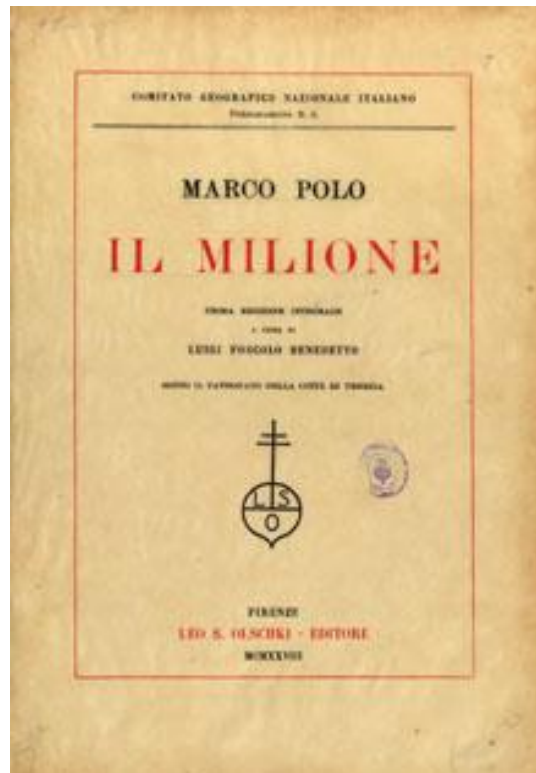


図1 表紙

III 最も古いトスカナ語訳 (TA)

1 このグループの現在の構成

F および F1 とほぼ同じ一フランク・イタリア語稿本が、千三百年代の始めにトスカナ語に訳された。その古い訳の写本が五つ今に伝わっている。

TA1 : フィレンツェ国立図書館 Ms. II IV 88 (旧 Magliab. cl. XIII, n.104)、ポーロのテキストのみを収める。紙、小型四つ折り判、286 x 200、ほぼまず千三百年代前半作、現 82 葉、1 欄組、1 ページ 31 か 32 行。各葉および四つ折りの元の番号の痕跡から、最初四つ折り 7 帖と紙 1 枚すなわち 85 葉から成っていたことが分かる。最初の 3 枚と XLI 番が落丁している。LVIII と LXIX および小規模ながら V 番の紙に部分的な破損がある。数多くの染みとインクの色あせのため稿本全体が劣悪な状態にある。章番号なし。冒頭文字のいくつかが赤でなぞられている。書き出し：「教皇が選出され、自分たちのことを証明してくれるよう」。結び：「ヴィネーギアの高貴にして偉大なる市民、ニコロ・ポーロ殿の息マルコ殿ほどにかくも世界を探索した者は、キリスト教徒、サラセン人、タルタル人、異教徒とわず、かつて一人もなかった。神に感謝を、アーメン、アーメン」。

保護紙の一つに加えられている書き込みから、1452 年にピエル・デル・リッチォ Pier del Riccio の所有になり、彼とその兄弟に母から遺贈されたものであることが分かる。1589 年にその書き込みが棒線で消され、次のものにとって替わられている：「小生ピエロ・デル・ネーロ、本日 7 リラにて購入」。1691 年の『クルスカ辞典』*Vocabolario della Crusca* 第 3 版にはグァダーニ家所有と記載されている。第 4 版（1738 年）ではクルスカ・アカデミーの所有となっており、ロッソ・アントーニオ・マルティーニのアカデミー稿本カタログに第 18 番として登録されている¹⁾。クルスカ・アカデミーの書籍は、1783 年ピエトロ・レオポルド^{2*)}によってその蔵書に加えられたことが知られる²⁾。

前述ピエロ・デル・リッチォの書き込みには、転写したのが誰であったかが記されている：「本書はヴィネーギアの貴人マルコ・ポーロ殿の航海と言い、我が母方の曾祖父ニコロ・オルマンニ Niccholò Ormanni によりフィレンツェにて書かれた。彼はクリストの 1309 年に死亡し、母が我がリッチォ家に持ち

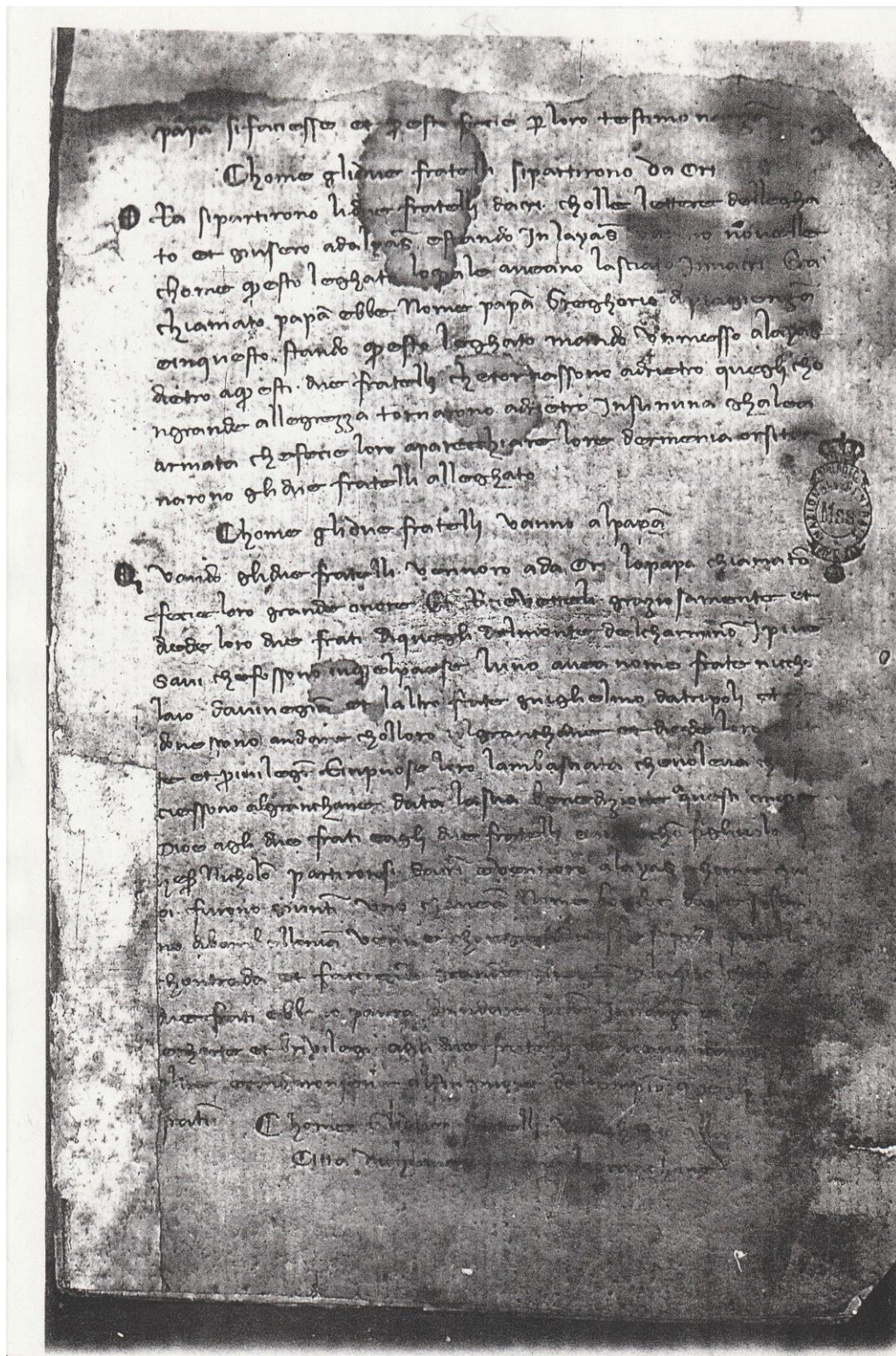


図2 TA1, f. 4r, 最初のページ (Ch.11 末尾から Ch.14 冒頭)

来たった・・・」。しかしながら、稿本の筆跡の年代が厳密に確定できないこと、それにこのニコロ・オルマンニについて確かな記録が他に何もないことからして³⁾、この後年の証言を留保なしに受け入れなければならぬ筋合いはない^{3*)}。

この写本は、レオナルド・サルヴィアティが『デカメロンの言語への覚え書き』第2巻第3章で取り上げて大いに賞賛している稿本と誤って同一視された：「近く」我々の見解では本書（すなわちストロツィの政治論）と並んで、言語の古さと言葉と調子の純粋さと美しさで、1298年に口述されたマルコ・ポーロ殿のミリオネが置かれてしかるべきである。古くはストラディーノのものだった極めて正確な一コピーのことであるが、最初と最後をともに欠いている」。我々が今取り上げている稿本は最後を欠いていないことからして、この最後の言葉はこれには当てはまらないことは明らかである。にもかかわらず、他ならぬゼーノがフォンタニーニの『イタリア雄弁双書』への解説で、これをサルヴィアティの言う稿本と混同している⁴⁾。この稿本はまた、かつてアカデミーの所有になっていたからのみならず、アカデミー会員たちがイタリア語と信じたものの公式の典拠の中にこのテキストが取り入れられたがため、「クルスカ稿本」とも呼び慣わされる。ピエロ・デ・リッチョによって帰されて、誰からも疑われなかった大変な古さと、[クルスカ・アカデミーの]「引用語彙表」の中に現れるその「美しい言語」に捧げられた誉れのために、「オッティモ」Ottimo（最良）との別称も与えられた。この正当性を欠く資格付けの最初の責任者はアポストロ・ゼーノだったに違いなく、彼は前述の解説の中で誤って次のように書いている：「この旅行記をペン書き稿本と対照させて刊行すれば読者に広く受け容れられるであろうが、その最良のテキストを所蔵しているクルスカ・アカデミー会員たちによってでなければ、それは十分にはなし得られないであろう」。かの称号は、これの最初の出版者バルデッリ - ボーニ伯によって採用され広められたのだが、次の告白がそのことをよく示している（『ミリオネの歴史』*Storia del Milione*, pp.v-vi）：「私が出版せんとしていたペン書きのテキストが、くこの作品の今に伝わる最も古いものであり、クルスカ辞典の編者が言葉の黄金時代の他の作家には見出し得ぬ少なからざる語彙を採録した純粋な源泉の一つであった、という高い価値を有する」という事実思いを致すとき、この企ては私に少なからざる興奮をもたらした」。

この稿本は何度も刊行された。最初は1827年功多きバルデッリ - ボーニ伯によってであるが、その仕事が完成したとき彼は正直に次のように認めた：「最初、クルスカ・アカデミー会員に引用されたミリオネの俗語版の出版に着手すると宣言したが、この労でもって私は言語に貢献しただけで、歴史と地理に

はあまり貢献しなかったことに気付いた」。「これを大げさに誉めないように」と明言されたその願いにもかかわらず、バルデッリの手になったテキストは1829年ヴェネツィアでB・ガンバ編で再版された。以下、1841年ヴェネツィアでL・カッレル監修『イタリア科学・文学・芸術古典叢書』中にゴンドリエーリの活字で、1843年パルマでフィアッカドーリ社から、1851年ウーディネでO・トゥルケット編「トスカナ語の若き研究者のための」双書中、1863年前掲A・バルトリにより、1873年トリノでS・フランチェスコ・ディ・サレス・オラトリオ会の印刷所から、1878年ミラーノでエツィオ・コロombo編、1886年ミラーノでソンツォーニオから、1899年ミラーノで出版社ラ・ミラーノから地図と挿絵入りで、1912年バーリでD・オリヴィエーリ編『イタリア作家』集に、1916年にはフィレンツェでO・ティベリ編で、再版された。

これらの版のどれ一つとして学問的基準でもって行われていず、同写本の正確で信頼するにたる復元とみなすこともできない⁵⁾。

TA2 : フィレンツェ国立図書館 Ms. II IV 136 (旧 Magliab. cl. XIII, n.69)、14世紀、紙四つ折り判、他の様々な種類の作品とともにポーロのトスカナ語テキストを収める。最初と最後を欠き、現状では番号2から64の63葉からなり、その番号は痕跡の残る元の番号と一致している。書き出し:「かくて二人の兄弟はこの使節たちと一緒に出発し、北とギリシャ風[北東]の方向に1年間進んだ」。結び:「また、そこには多くのハヤブサとオオタカの生息する島があり、世界の多くの地に持ち運ばれることを皆さんに言っておこう。ロシアあるいはオルベケ[ノルウェー]から・・・ないことをご存じありたい」^{4*)}。

1670年には上院議員カルロ・ディ・トンマーズ・ストロツツィの所有になっていた。第2葉にストロツツィアーナ図書館にあったときの番号378がまだ残っている。その時付けられていたタイトルはまったく恣意的なものである:「1295年に行われたマルコ・ポーロのタルタリア旅行」。1786年に現在の図書館に収蔵された。

サルヴィアティが言っているのはこの稿本のことであろう。その場合は、これの所有者にストラディーニことドメニコ・マツツォーリが数えられよう。

TA3 : パリ国立図書館 Ms. ital. 434、マルコのイタリア語テキストのみを収める⁶⁾。紙、最初と最後に羊皮紙の保護紙、全 56 葉、元の番号はほとんど全ての個所で裁断されてなくなっている。新しい番号は誤って第 1 葉を飛ばし、2 枚目からの 12 葉に 1 から 12 の番号が振られている。しかしその後からは古い番号と一致する。千三百年代トスカナ人の手になり、章の冒頭とタイトルが色付きのこの作品は、私には職業写字生のものとは見えない。1 覧組の各ページは規則正しい密度を有さず、行数も一定しない。最初の見出しは多くの個所で消えている：「ヴェネツィアの＜マルコ・ポーロ殿の書＞ここに始まる。・・まず始めにニオッラオ殿が・・＜次第を＞述べる。皇帝陛下に王に公、それにこの世の様々な種類の人間と様々な異なる土地のことをお知りになりたいお方は誰あれ、この書をお読み下され・・」。結び：「・・キリスト教徒であれサラセン人であれタルタル人であれ異教徒であれ、ヴェネツィア市の高貴にして偉大なる市民 N. 殿の息マルコ・ポーロ殿ほどに世界をかくも探索した者は一人としていなかった。マルコ・ポーロ・ディ・ヴィネーギア殿によりものされたミリオネの書ここに終わる、神に感謝を、アーメン」。

最後の紙の裏に（もし私の読み違えでなければ）「ペトレ・イ・チェラーノ殿」とある。これから次の可能性が考えられる。まず、ナポリのフェルディナンド 1 世によって誰かその家臣か役人から取り上げられてその蔵書に収められた一群の書籍の中に含まれていた。それがその後、あるいは征服に続いてナポリの図書館の一部を自分のものにしたフランス王シャルル 8 世の蔵書に入ったか、あるいはフェデリーコ 3 世がその別の一部をアンブロワーズの枢機卿に売却した結果、それが後に国王の蔵書に加えられたか、である^{5*)}。最初の羊皮紙の表裏と第 1 葉の上余白に様々な目録の中で記載されたいろいろなタイトルが書かれてある：「ヴェネツィアのマルコ・ポーロ新世界へ」「ヴェネツィアのマルコ・ポール航海を語る」「俗語によるマルコ・ポーロ殿の書」。⁷かつて表紙になっていた羊皮紙の表の前述の最後の一冊古いタイトルの下に同じ手で、「備えあれば憂いなし」との格言が記されている。

TA4 : ラウレンツィアーナ図書館 Cod.Ashburnhamiano 525、ポーロのテキストのみを収める。美しい紙稿本、46r に写字生自身による日付あり(「1391年11月20日火曜日夜書き了えり」)、全48葉、2欄組み、章の冒頭とタイトル赤。46v-48r は目次。書き出し:「ミリオネと呼ばれるヴェネツィアのマルコ・ポーロ殿の書ここに始まる。タルタリア、三つのインディア、その他多くの国々のたくさんの珍しい事どもを語る。グラン・カーネのもとに赴いたのは、一人はマッテオ殿もう一人はニコラオ殿という二人のヴェネツィアの貴人だった」。結び:「以上に述べてあることからして、ヴェネツィアの高貴にして偉大な市民ニコロ殿の息マルコ殿ほどに、世界をかくも探索した者が他に一人としてあったとは我々には考えられない。アーメン」。

プッチ・コレクションにあったマルコ・ポーロの三つの稿本の一つ(ラウレンツィアーナ図書館にコピーされて所有されていた旧カタログの n.129)。ジュゼッペ・プッチ公爵の写本は1843年リーブリによって購入された。この稿本は、アシュバーンハム公爵の所有になっていたリーブリ文庫がイタリア政府によって獲得されたおり(1884年)、フィレンツェに戻った。

TA5 : フィレンツェ国立図書館 Ms.II II 61 (旧 Magliab.cl.XIII,n.44)、異なる手になる種々の題材の詞華集、cc.1-40 にポーロのテキストを収める。旧番号(cc.315r-354v)は、これがかつて別の雑録集の一部だったことを示している。凡庸な紙コピー、転記者による正確な日付けがある(c.40v):「マルコ・ポーロ・ダ・ヴィネーザ殿の書ここに終わる。私アメリオ・ボナグイージが、チェレット・グイーディのポデスタだったおり^{6*)}、暇と退屈しのぎのために書いたものである。しかし私には信じがたいことであり、彼の言っていることは嘘といわんよりは奇蹟以上のもののように思える。彼が述べていることがたとえ本当であったとしても、私は信じない。しかしながら、この世には国によって極めて様々なことがある。しかしこれは、まるで信じられないことや信頼すべきでないことを自分の好みで集めたかのようだ。ただし、私に関するかぎりである。上述チェッレットにて主の1392年11月12日集め終えた。ここに終わったゆえ、我らが主クリストに感謝を捧げよう、アーメン」。さらに下に、「本書はフィレンツェのサント・ミケーレ・イン・オルトの住民アメリオ・ディ・ジャキーノ・ボナグイージの所有になる」。かつてガッディ・コレクションに属しており(1755年ガスパーレ・ガッディにより売却)、302と記載されていた。

書き出し:[略、TA4に同じ]。結び:[同]。

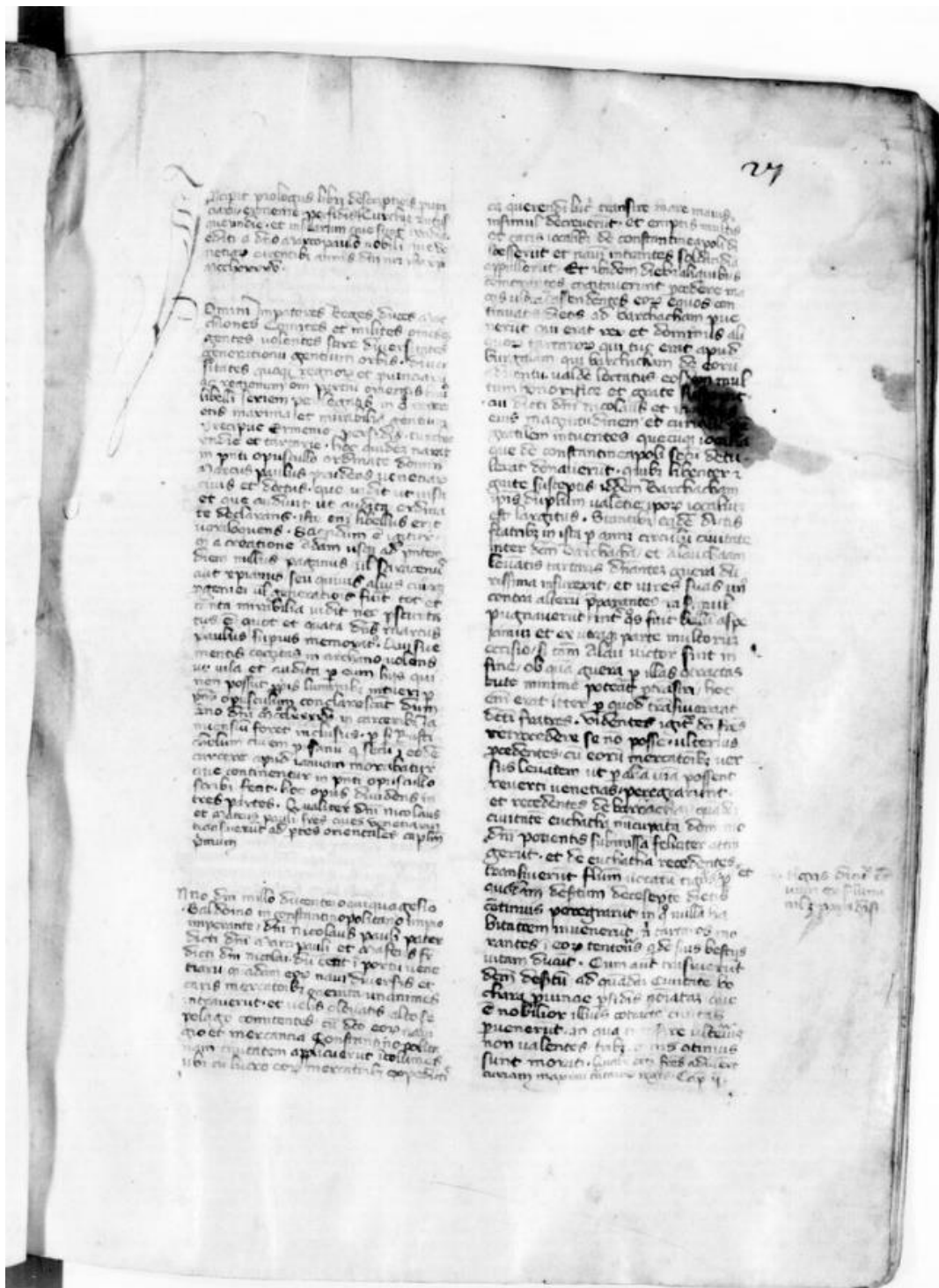
2 パリ国立図書館 Ms.lat.3195

以上、現存している稿本を挙げたこのトスカナ語グループに一つのラテン語版が結びつくのであるが、その版ではこのトスカナ語訳が、後で取り上げる大きな成功をみた別のテキスト、すなわちピピーノ修道士のテキストと入り混じっている^{7*)}。

この興味深い混交を呈するのは、私の知るかぎり 1 本のみである。

パリ国立図書館 Ms.lat.3195(旧 4264)——ずっと以前から研究者の注意を引いてきたポーロ写本の一つ——異なる手になる様々な小稿からなる。マルコの書の前にアルフォンソの『聖職者典範』*Disciplina clericalis* とオドリーコの『旅行記』*Peregrinacio* があり、後にプレーテ・ジャンニ〔プレスビテル・ヨーハンネース〕の書簡が続く。マルコ・ポーロは ff.27a-61d を占める。もとは綺麗な写本だったに違いない。半斜字体の筆跡はなかなか優雅で、冒頭が赤で色付けされ、章題が見出しになっている。羊皮紙のタイプは、おそらくイタリアで作られたであろうとみなさせるその書体と一致する。14 世紀のもの。現 f.56 はひどく破損しており、a 欄から d 欄までほぼ全体を欠く。f.57 は b および c 欄の最後の数行だけを残す。f.68 も真ん中が少し破れて損じている。書き出し：「エルメニア、ペルシア、トゥルキア、両インディアなどの諸地方ならびにインディアにある島々について記す書のプロローグ、ここに始まる」。結び：「彼らは主君アルゴンのいるところにやって来るや、その大天幕に急いだ」。本文を書いたのと同じ手で、欄外に訂正・書き込み・注記が見られる。書き込みの一つ、教皇グレゴリオについてのものから、この<筆者>が誰か聖職者だったことが分かる：「これは、公会議を催し、その会議の帰りにトゥスキア地方のアレッツォの町に寄り、そこで病に陥って倒れ、そのまま彼にふさわしくいとも盛大に埋葬されたグレゴリウスであった。その死は、彼が懐いていた善き意図ゆえキリスト教全体にとって大きな痛手であった。彼はキリスト教の大いなる栄光とともにみまかりたいとの願いを懐き、かの公会議ですでにそのように手はずを整えていた」^{8*)}。欄外にはまた、別の手になる注記と書き込みが残っている。

これは、『地理学会編航海と回想録集』*Recueil de voyages et de mémoires p. p. la Société de Géographie* 第 1 巻に、フランス・イタリア語テキストの付録として出版された (pp.297-494)。



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France. Département des manuscrits. Latin 3195

図 5 BNF Ms. Lat. 3195, f. 27r (MP 最初のページ)

3 アントーニオ・プッチの要約

このトスカナ語訳の興味深い要約が、フィレンツェの詩人アントーニオ・プッチ(1388 年没)の著名な『覚え書き』*Zibaldone* の中に収められている^{9*)}。ラウレンツィアーナ図書館 Ms.Tempiano 2 はその奇妙な雑録集の貴重な自著であり、ずっと後の手で『世界の創造、他の物語、千三百年のダンテの詩数編』とタイトルが付けられているものだが、その cc.23r-41r にポーロの話の全くの梗概が収められている。これが、プッチの書のけっこうな成功に最も貢献した部分の一つだったことは確かであり、かなりの数の写本が今に残っている。その一つ Ms. riccard.1922 は、このプッチの作品全体にマルコ・ポーロの名を付け、最初の紙の冒頭に、「本書は、ヴェネツィアのマルコ・ポーロ殿が世界を旅して書き記したもので、注目すべきあらゆることがここに書き留められてある」とあるし、保護紙の一つに書き込まれたノートは、最初の羊皮紙の表紙には、「世界を旅して書かれたマルコ・ポーロ」と記されてあったことを示している⁸⁾。

最初の 22 ページが、すでに世界各地の奇妙で空想的な記事の興味深い寄せ集めで、マルコの話にプッチが驚くべき記事の鉱脈のように取り組んだことは明らかである。この貴重な作品のことを彼がジョヴァンニ・ヴィッラーニの『年代記』*Cronica* から知った、ということは有り得ないことではなく、彼はかの年代記を詩句の中に散りばめるほど親しみまた好んでいたし、またその中には、タルタル人の事績をよりよく知りたい者は、「彼らの力と支配について多く語っているヴェネツィアのマルコ・ポーロ殿の書いたミリオネという書物」を読むように、と勧めてあった(第 5 巻第 29 章)^{10*)}。

短いつなぎの文句(「今からタルタル人の町・地方・風習について語るが、それだけである」)の後、要約が始まる:「ジョルジアニアは、四旬節でなければ魚が姿をあらわさない海のある国である」。ラック地方の章で終わる:「ラックはサラセン人とキリスト教徒のいる地方で、酷い寒さのため暮らすのに難儀し、その少し向こうは寒さゆえ住めない。タルタル人とグラン・カーネとその他の外国についてはこれで終わる」。続いて同じ手で、その後に加えられた書き込みとして、プッチの親しんだダンテの引用があり、『覚え書き』の別のところにも繰り返されている:「たくさんの驚くべき事どもについてはこれでおくが、至高の詩人ダンテがこのように言っているのを思い出す:嘘の顔した真実は、できようかぎり口閉ざさせ、罪もないのに恥をかく」^{11*)}。この要約の対象となった作品の著者のことは、その中に何度となく出てくる:c.27r「この国々にあつたヴェネツィアのマルコ殿は、これら記事が採ってこられたその書物の中で、そうしたことをよく目にしたと書いている」、c.31v「君主の幕営は、マルコ殿

が見たかぎりでは全て絹であったことをご存じありたい」、c.33r「またマルコ殿はそれを見たと言っている」等。その名は、たいていは目撃証人として持ち出されている。

プッチが前にしていたテキストが、ここで取り上げているトスカナ語訳であったことは確実である。地名の独特な崩れが、そのことを証明するに充分であろう：Jadis<ヤズディ>，Reobales<レオバール>，Milice<ムラヒダ>，Suppunga<サプルガン>，Jenneraus<イエネラウス>[全体]，Ammie<アニウ>，Eumangi<エウマンジ>[マンジへ]，Neguera<ネクヴェラン>，Evar<デヴァール>，Scara<スコトラ>，Mandegascar<マダガスカル>，Cacchibar<ザンジバル>，Nabasce<アバシュ／アビシニア> 等。

独特の同じ誤りが繰り返されていることも、それに劣らず説得力をもつ：

23v:E offerbero oro incenso e mirra. Oro per sapere s'egli era signore terreno. Incenso per sapere s'egli era iddio. Mirra per sapere s'egli era etternale「彼らは金と香と没薬を捧げた。金は彼が地上の主であるか知るため、香は神であるか知るため、没薬は永遠なる者であるか知るためであった」。
24r:Chormos è una città dove arrivano molti leofanti 「コルモスは多くの象が到来する町である」。 28v:E in questo paese nasce il moschado, il quale genera una bestuola come gatta 「この国には麝香鹿が生息し、雌猫のような動物を産む」。 32v:porcellane bianche che ssi trovano in mare e fannosene schodelle 「海にありそれからお碗を造る白いポルチェッラーナ[コヤス貝]」。
37v:Quando muore il Re vi si usa d'ardere il corpo suo con tutti i figliuoli salvo che quello che dee redare ciò è il primo genito 「王が死ぬと、後を継ぐべき者すなわち長子を除く全ての子供と共にその遺体を焼く習わしがある」。
40v:E risposto il veschovo che non voleva gli fece fare per forza il segno de saracini nel volto 「司教は、顔に無理やりサラセン人の印を付けられるのは断る、と答えた」。

プッチは自分の典拠の言葉をけっこうよく残している：

24r:I cui frutti son datterì e pistacchi e di molti altri che non sono di qua / TA1:Suoi frutti sono datterì pistacchi frutto di paradiso e altri frutti che non sono di qua 「そこの果物はナツメヤシ、ピスタッキ、パラダイスリンゴ[バナナ]、その他当地のではない果物である」。 26v:E tutti sono bozzi di loro donne ma non se rrecano in vergogna / TA1:e tutti quegli di quella provincia sono bozzi delle loro moglie ma nol se tengono a vergognia 「この地方の男たちはみな妻を寝取られるが、そのことを恥と考えない」。 29v:ed è canuto e in viso bianco e vermiglio com'una rosa / TA1:Egli è canuto ...egli ae lo suo viso

bianco e vermiglio come rosa 「彼は白髪で・・顔はバラのように白と紅色だった」。 32v:L'albero che ffa i gharofani e le foglie sue come'l chorbezzolo / TA1:Egli è un albero piccolo che fa le foglie grandi quasi come corbezzе 「それはちょうどヤマモモのような大きさの葉をつける小さな木である」。 34v:Ed avvi dodici arti che ciascuna per se a dodici migliaia di stazzoni o volete botteghe / TA1:In questa città v'a dodici arti cioè d'ogni mestiere una e ciascuna arte ae XIIIm istazioni cioè XIIIm case 「この市にはそれぞれの職業に一つずつ 12 の組合があり、各組合には 1 万 2 千の仕事場つまり 1 万 2 千の店がある」。

プッチの要約と TA との違いが、プッチが今に伝わるのとは大きく異なる稿本を前にしていたことを示すとは思えない。きっと彼が、楽しみながら急いで要約を行ったときの大胆さの証しではあろうが。TA1 のように、「耳に金・銀・真珠の小さな輪をしている」ではなく、「金・銀・真珠で囲まれた耳をしている」(c.25v)と書いたとき、彼が本当によく理解していなかったのかどうかは分からない。しかし、次のような場合は確かに間違いである:「タルタル人は最初たいてい山中に住んでいた」(c.27r) (TA1「タルタル人は北方に住んでいた」)。TA では、噂されているのはプレスト・ジョヴァンニのことなのに、彼はタルタル人が払う十分の一税のことにしてしまう:「この収入が何倍にも増えたので、全世界がそのことを話している」(c.27v)。TA1 では「馬をそれも最高のを殺す」とあるところで、「最高の騎士を皆」(同) 殺すことにしてしまう。次の文がどのようにして生じたのか私には見当もつかない:「長男はチンギという。二番目はテムル。他は明らかにできないとマルコ殿は書いている」(c.30r)。警備兵 1 万 2 千人は大法廷の 12 人と混同される(c.31r)。カンジグの住民全員の特徴である入れ墨は、女性だけの装飾となる(c.33v)。彼の典拠の欠陥に帰しえると見られる唯一の誤りは、カイドウの娘の名を<輝く月>ではなく、<輝き>としていることで、おそらくこれはすでにその前からあった小さな欠落の反映であろう。プッチはこの娘を「輝く娘」と呼んでいる。

この抜粋を何よりも興味あるものとしているのは、その善良な活発さと空想のひらめきでもって、あらゆる個所で要約者の姿がくっきりと見えてくることである。このフィレンツェの元気者は、当時の他の読者と同じく本に圧倒され、その素晴らしい魅力を感じ取る。自分の言葉を加えるときは、自分自身を説得しようと徹しているのが感じられる:「これから君主の宮廷と偉大を語るが、その一部にすぎない。すべてを語ることはできないだろうし、語ったところで聞く者にはお伽噺と思えるだろうからである。しかしそれでも真実は真実であり、彼らにとって我々の風習や犠牲を信じるのは、我々が彼らのを信じるのに劣ら

ず不可能と思えるからである」(c.30r)。マルコの言葉も、彼のもっていた伝統的な迷信を充分には打破するには至らず、次のように繰り返したり：「火によってさらによくなるから、サラマンダーと呼ばれる。これは、火の中つまり他のいかなる動物も生きることにはできないあの炎熱の中で生きているサラマンダーという名の小さな蛇にちなんでいる」(c.27r)、次のように挿入したりしているのには驚かされる：「カウカーソ[コーカサス]は、蛇の多さのため人々から放棄されたインドの果ての山である」(c.33r)。ある種の細部をその正確な現実の中で捉えることができないのだが、それでも正確に説明しようと努める。いくつかの想像上の補足がこの論理的努力の跡を示している。例えば c.31r で、卓の名前がよく分からなかったものだから：「食べ物が下げられると皆、＜ほぼ＞祭壇の上に置かれた卓の所に行くのだが、それはグラン・カーネの名が＜金で＞書かれてある以外はすべて紅色をしている」(cf.TA1 p.101)。c.36r で、皮膚の下に小石がもてることが分からなかったかあるいは信じられなかったため：「その者が死ぬと、腕の下に＜金の糸でつながれた＞いくつかの貴石が見つかり、それをグラン・カーネのところに持っていった」(cf.TA1 p.191)。c.38r で、理解できなかったのかそれとも疑って：「商人たちは肉の塊に＜長い綱をつけて＞谷に投げる。後でそれを引き上げると、ダイヤモンドが突き刺さっている」(cf.TA1 p.213)。我々はこの読者とテキストとの対話に付き合うことになるのだが、例えば convade <擬婉>(c.33r)についてのプッチの解釈は個人的な感想である：「彼女らがそうするのは、その間夫が他の女に気を向けないからである。40 日たつと妻が戻ってきて夫と臥し、すると隣人皆が盛大に祝う」。しかし、書かれてあることを柔軟にドラマチックに追体験したいという彼の抑え難い欲求に応える個所は、さらに多くまた特徴的である。彼の空想は、すでに干からびたトスカナ語訳をまさしく騎士物語的な場面に転換する(c.31r)：「そしてこの日彼に 2 万頭以上の白馬と 3 千頭以上の象が贈られ・・・覆いの上に置かれてある武器から分かるかぎり、それを贈った者の名を叫びながら皆彼の前を行進する」。これは、西方の我々の祭典の記憶が顔を出しているプッチの書き足しである。TA では「大声で叫ぶ者」とあるところを、我々が詩人は「大博士」に立ち上がらせる。すでに TA はグラン・カーネがジパングでこうむった大敗北を勝利に変えていたが、我々の騎士物語文学の記憶と民衆詩人としての彼の楽観主義はそれをさらに色づける(c.36r)：「そこで最後に、人間を除いて土地を＜自分たちの船で持ち去ることのできるものと交換した。こうして彼らは貴石・真珠・金銀の宝石をどっさりもって出発した。それは、もしグラン・カーネが何も自分のものにしなかったなら、常に誉れ高くその全宮廷で飾られたであろう。この重臣の隊長がグラン・カーネのもとに着くと、君主はその知らせ

を聞いて、彼に盛大な贈り物をし、大なる支配権を授けた>」。カムル[ハミ]の女たちの滑稽な逸話もやはり彼の創作である(c.26r):「タルタル人の君主モングは、この風習を止めさせようとして、他所人がそのようなふうに泊まってはならぬと命じた。＜そこで女たちはこっそり相談し、口達者な女の使者を高価な贈り物とともに彼のもとに派遣し、この風習はとても神々の気に召し、そのため住民の数が増えより多くの召使を持つことになったのだ、と訴えた>」。したがって、他のより控え目な追記も我々を驚かすことはない。グラン・カーネの宮殿には、重臣と騎士は別々の門から入らせる(c.30r)。キリスト教徒に対するカリフの罠を、彼を改宗させるためのキリスト教の司教の企てから生じさせる(c.33r)。ドル王の小話にいくつかの尾ひれを付ける(c.32r)。「皆裸で暮らしている」ネグエラ[ネクヴェラン]の住民に思いを致して、「彼らをじっと見たりあざ笑ったりした者は危険な目に遭う」と付け加える(c.37r)。すべては、彼がこの物語を自分自身に説明するときの生き生きとした喜びを証している。TA1は単に:「この島の誰かが身請けされない者を捕まえると、親戚や仲間を招いてそれを料理させ、彼らに食わせる」。一方プッチは(c.36r):「彼らの親戚と友人が宴を催し、大騒ぎしてそれにかぶりつき、生のまますっかり平らげる」。TA1は原典に忠実に:「4日生きていたが、その後死亡していた」。プッチ(c.23r):「4日目に塔を開けさせると、財宝の上につつ伏せに倒れているのが見つかり、惨めな形で埋葬させた」。

この想像力豊かで親しみを覚えさせる改作者によって残された美しい個所の中には、特異な空想上の精気でもって書き直された「山の老人」の物語が、もちろん数えられなければならない(cc.24v-25r)。[引用略]

4 TA のオリジナル

以上の五つのトスカナ語稿本のどれも、かの無名の訳者の仕事をその最初の全体性において保ってはいない。A1 と A2 はそもそも落丁がある。A4 と A5 は全部揃っているように見えるが、これまた疑いなく最初の数章を欠いていた一テキストに由来する同一稿本のコピーである。A3 は揃った形で今に伝わっている唯一のものであるが、読みがかなり短縮されている。この我々が栄あるトスカナ語版「マルコ・ポーロ」をそれにふさわしい形で出版するためには、この小グループをはっきりと見極め、その原型を批判的に復元することが必要だったのは明らかである。そのことは、A1 の最初の出版者バルデッリ・ボーニが、このテキストの重要性は言語面だけであること、またこの古い訳をかのヴェネツィアの旅行者のはるかに広範で堅牢な作品と直ちに同一視してはなら

ないことを言葉と事実でもって示した後は、なおさら必要なことだった。そうした幻想を吹き払うために彼は、このトスカナ語訳を収めるその巻に、ラムージョによって出版された大きく異なる版を収める別の特別の1巻を加えたのだが、それも何の役にも立たなかった。彼によって転記されたトスカナ語『ミリオネ』（図6）は、今日なおイタリア人読者が識る唯一の「マルコ・ポーロ」のままである^{12*)}。さらにまた、それを言語的に役に立たないものになっている極めて多くの誤りとともに出版され続けている⁹⁾。知識層向けの再版では——バルトリ（図7）とオリヴィエーリの版のように——1827年の[バルデッリ・ボーニの]テキストがまたもやいくつかの補完的な引用の追加が用意されただけで、それがまさしくマルコの作品全体であり、それをその全体性において復元するには何らかのちょっとした追加で充分である、といった誤解を永続的なものとしてしまっている。

もちろんバルデッリ・ボーニとバルトリは、A1が作品の最初と半ばで呈している二つの大きな落丁と様々な破損を補うために、またしばしばひどく薄れている筆跡の困難をよりよく克服するために、また一目でそれと分かる誤りを訂正するために、この家族の自分たちが知っていた稿本を全て活用した。第5—9章、第83章の終り、第84—87章、第88章の始めを提供したA2、出だしの章（「ヴィネーギアの二人の高貴な市民云々」）といくつかの良好な異読が採られたA4とA5である。しかし彼らは、A1を訂正し補完するために依拠したこれら稿本の、「オッティモ」に対しての価値を明確にすることができなかった。つまるところ、それらがモノとしてより後年のものであるため、この問題に取り組まなかったのである。それらが本物からどれほど遠いかは、後に他の研究者によっても繰り返されたバルデッリ・ボーニの断言、A4は「オッティモ」と読みは同じだが「フランス語オリジナルに手を加えている」との判定がよく示している。

もしこの家族がもっとよく知られていたなら、冒頭を欠くコピーを前にしていた一写字生によって明らかに繕われたものであるA5の最初の個所に頼ってそれを補い、そのテキストの始まりとすることはなかったであろう。他のすべての稿本に欠けているそれが、A3には残っている。

前に引いたオルマンニにかかわる書き込みは充分には信頼できないにしても、これらの稿本の中ではA1が多分一番古いものであるだろう。しかし、そこに内在する重要性は、そのモノとしての古さに基づいてのみ余りにも軽々しく主張されているほどではない。我々がFGにとって必要性を主張したのと同じ基準、すなわちFとの対校をTAにも当てはめるならば、A1は全体的にその兄弟写本よりも極めて保守的でないことが明らかとなる。もちろん、もしTAの校訂版

のための底本を選ばねばならぬとなると、組織的に要約されている A3 も、余りにも頻繁に短縮されている A4・A5 も、これと競うことはできない。しかし A2 については、これを選択すべきか迷って当然である。しかしながら、どのテキストが採用されようと、この家族の写本は（制作年代がいつであれ）どれも失われたオリジナルに極めて近く、また何らかの理由で皆本物であることを念頭に置いておくことは絶対に必要である。

まず第一に、プッチの要約とラテン語訳が忘れられてはならない。前者は、固有名詞の時としてより元の形に近い綴りでもって、今に伝わるのよりもより崩れていない一コピーに基づいて行われたことを示している。いわゆる「地理学会ラテン語版」のモデルも、今日知られている稿本以前のもののか、あるいは少なくとも祖本により忠実であったに違いない。そのモデルを訳者は、構文においても語彙においても、元のトスカナ語版をただ引き写しただけのその荒っぽいラテン語の中に極めて特異な透明さでもって反映させているから、我々はそのテキストから採られたものと、一方ピピーノに遡るものとを確実に見分けることができるほどである。このラテン語訳（以下簡便のために LT と呼ぶ）は、時として良好な読みを残している唯一のものである。他のどれにも「この町には一軒のとても裕福なく家>がある」（A3「とても裕福な館」）とあり、F126/5^{13*}「この町には一軒のとても立派な家がある」と同じなのに対して、LT には正しく「とても立派なくもの>」とある。F118/38 の *orbeque*<月桂樹>をどれも *corbezze* あるいは *corbezzole*<セイヨウヤマモモ>と訳しているのに対して、LT は *laurus*<月桂樹>。トスカナ語テキストにも *orbaco* あるいは *orbeque* とそのままあった証拠である。Carnuto<肉付きのよい> (F82/3-4) ではなく、<美しい形の白髪>とあるのは、LT に<形良く肉が付き>とあり、ピピーノ版には見られぬ表現であることからして、確実に A1・A2・A4 の底本の誤りである。F175/29 の *ostrige*<牡蠣>についても同じことが言え、A1・A2 では *aringhe*<ニシン>となっており、LT のみ *ostreas*<牡蠣>とある (A2 は解読不能)。A1・A2 には奇妙な欠落がある：「<カラス>の方にいくらか」(F163/2-3「南西の方にいくらか」)。A4・A5 はこれを省略している。LT は正しく「<南西の風>の方向にいくらか」とある。ともに<西> (F106/3-4) で終わる二つの句が、A1・A3・A4・A5 では二つ目が省略されているのに対して、A2 と LT にのみ「カンバルを発って西の方に四か月も行く」と残っている。トスカナ語訳者は F117/21「*au fil d'Argon*<アルゴンの息子のもとに>ある」の前で確信がもてなかったにちがいない。そこで、よくするようにこの言葉をそのままにした：A2「私が書いたように、本書の冒頭の言葉 *au fi anghom*」と、LT「私が書いたように本巻の最初にある言葉 *sub filio Argon*」。これは、LT に

用いられた稿本ではフランス語はまだ T2 でほど変形していなかったことを証していると思える(他の写本はどれも、もちろん理解できなかったため、省いている)。F61/7-8 の個所は LT は比較的正確である：「そこは全体の大地方で、その中にこの地方と最後に皆さんに話したあの二つの地方があり、タングスと呼ばれる」。一方これに対応する刊行テキストは A4 で確かめて：「そこは大地方で、イエナラウスという。そこにこの地方と私が皆さんに話したあの二つがあり、この地方はカングットと呼ばれる」。A2 では a nome<という>の 2 語が、すでに書かれた文に加えられているが、それから LT が訳した元のテキストを復元することができる、つまり：「この地方と先に私が皆さんにお話したあの二つがあるイエネラウス大地方は、カングットと呼ばれる」。A1 と A4 では：「土地はとても深い水ですっかり取り囲まれ、<そこへは橋を歩いて行くことはできない>」(F140「どの町にも橋を渡って入る」。一方 LT「どれもとても深い水で取り囲まれ、そこへは橋を歩いてでなければ行くことはできない」(A2 では se no<でなければ>は読み取れないが、そこにはっきりと空白が見られる)。A2 との一致はけっこう頻繁で、共通の中間稿本のあったことを考えさす。しかし確実なことはなにも断定できない。A2 との親戚関係もけっこう緊密である (F107/4 : badie<僧院>は、A1「ここには偶像の biade<食べ物>がたくさんある」、LT「ここには blada がたくさんあり、その地域の人々は皆偶像教徒である」)。A3 ととも (F114/3-4 は、A3「アムバレット・マンジという、すっかり piena<満ちた>地方」、LT「全て plena<満ちた>」、一方 A2・A4・A5「全て piana<平らな>」、A1 は省略。F130/12 は、A3「lardo<脂肪>肉と米を食する」、LT「lardo<脂肪>肉と米を食する」、他は全て laido<不潔な>)。A4・A5 ととも緊密である (例えば、F128/13-4 は、A1・A2 の capo<頭>に対して、LT とともに F と同じく corpo<体>とある)。

すでに述べたように、A3 は全体的に他よりずっと縮約されているが、その上転写としてとてもずさんで、書き間違い、小さな欠落、勝手な解説がいっぱいある (例えば、「たくさんの樹と土着の人々」ではなく、c.30r「たくさんの土着の人々」。「カッタイ全体に」ではなく、c.32r「カッタイにまで広められる生姜」。「10 台もの車が横に並んで通れるほど広い」は、c.30v「10 人の騎士」。「とても澄んだ」酒ではなく、c.33v「米と香味料で酒を造り、とても高い」)。しかし時として、A1 よりも F に近いときがある (例えば、「マンジの境界とも呼ばれている」は、c.32r「シンダファと呼ばれ、エマンジの境界にある」。A1 と A2 もそうであり、LT のモデルもこうであった「マンジの境界のアンコタと呼ばれる」)。

A4 と A5 は、同じモデルの独立したコピーである。これら二つの稿本の類似

性は、直接の共通の由来について疑問を残さぬほどのものである。一方、A5 が A4 の単なるコピーでないことは、A4 が正しいところで A5 がこのグループの誤りを残している稀でない個所（例えば、A4.c.19d「この卓と l'altare<祭壇>に香を振りかける」に対して、A5 は A1・A2 と同じく l'altre<他の（卓）>）、あるいは A4 が誤って省いてしまった表現を残している個所（例えば、A4.c.4 は、ともに giente<人々>で終わる二つの句のうち後のほうを飛ばしているが、A5 には両方ともある、「多くの種類の人々がおり、アラビと呼ばれる人々がいる」）が証している。とはいえ散発的な場合を除いて、チェット・グイーディの善良なポデスタによって残されたこのテキストは、A4 の無視しえる複製とみなしてもよい。写字生の見落としによってのみ説明可能な絶えざる間違いは、時代的により新しい方のコピーを無残なものにしている。A1 と対校すると、これら二つの写本の祖本はもちろん欠落や誤りはなかったが、何度かはそれも、元の訳を変えずに残している唯一のものである。例えば、オリヴィエーリのテキストの p.78 には不可解な構文がある：「彼自身週に一回は行くことを望む」——A2 でも同じ明らかに欠落がある——、A4 は正確に「週に一回<見に>」とある（F75/11「それらを見に行く」）。P.138、A1 は A2・A3・LT と同じく「勇敢な人物」とのみあるが、A4 は F と同じく「<かつ賢明な>」を加える。P.143、A1 は LT と同じく「ある者には気に入らないようにさせたから」とあるが（A2 ではおそらく訂正して「気に入らない」）、A4 は F と同じく「ある<靈魂>に」。多くの個所からこのグループの最初のコピーとの非常に近さがうかがえ、A4 と A5 はいくつかの興味深い特徴を保つという名誉を A2 と分かち持つ。例えば「iadis<かつて>その者を王にした」、A1（p.124）と他はこの奇妙なフランス語の生き残りを消し去っている。A1（p.156）「この地域はグラン・カーネの配下にある」は、A2「この地域はグラン・カアンにとっても frugha である」、A4「この地域はととても fuga である」。これはおそらく訳者が、F の「とても利益をもたらす」を、「とても勇敢である」でもって移し変えようとした証拠であろう。A2 のみが F121/35-6 の挿入句を保っている：「これらのどの地方にも医者はいない、cioè caragian e voncian e acin<すなわちカラジャン、ヴォンチャン、アチン>」。A4「これらのどの地方にも医者はいない」は、voncian<ヴォンチャン>という形そのものが、誤読されて欠落を引き起こしたことを疑わせしめる。A2 と A4 はしかし共通の奇妙な誤りをもっていず、F120/13 の「10」ではなく、「100 パッサ」となっている。

A1 と A2 についても、対校してみると同一の中間写本のコピーとの印象を絶えず受ける。ともに、「またもう一つの彼らの風習、結婚式をする cio<こと>をお話しよう」とあり、cioe<すなわち>ででない。albori<樹>ではなく、「胡

椒のなる altri<他のもの>」。Pelle d'armine<テンの皮>ではなく、「内部はすべて belle darmine<綺麗なダルミネ(?)>である」。「絹が豊富にあり、絹の薄地や錦を作る」を、「絹が豊富にあり、薄地は絹の錦を作る」。いくつかの欠落も共通する。例えば、「40 万ビサンティの値打ちのある商品のために、何度も大君のもとに赴いた」は、すでに最初の出版者たちが A4「たくさんの金銀の商品」でもって補わねばならなかった。いくつかの細部の検討は、二人の写字生が同一のコピーを前にしていたことを確信させる。A1 : dichovi senza fallo ch' entro le navi avea bene settecento persone 「船には確かに七百人もの者がいたと言おう」、A2 : dichovi senza fallo ch' entro ne lavi(sic) bene VIIc persone 「船には確かに七百人もの者が乗り込んだと言おう」。F19/20 および LT と対校すると、A2 は che' entrò ne le navi<船に乗り込んだ>と訂正されるべきであり、A1 は、同じ間違いの前に置かれると、entrò<乗り込んだ>を entro<合わせて>と読み、そして avea<いた>を加えたものである。A1 の写字生は自分の確信のなさを告白して:「オウアウトもしくはオリアトと呼ばれる別の種類の者たち」。Oriat<オリアト>は A2 にもあり、一方 A4 では Ouât<オウアウト>あるいは Onat<オナト>。A1 の次の個所は明らかに崩れている:「この塔の美しさと豪華さと、それがどのように造られ ov' elle erano<どこにあるか>をグラン・カーネに言ってよこした」。F126/25 の正確な訳は A2 にのみみられる:「この塔の美しさと豪華さと、それがどのように造られたかを<あるがままに>グラン・カアンに言ってよこした」。しかし、A1 がこの挿入句を単に良く理解できなかったから移動させたことは明らかだと思える。F129/10 の個所は、A1 「a petto<向かいの>第3の地方である」(この不可解な言葉を、出版者は皆そのまま残している)、および A2 「arieto<乾燥した>第3の地方である」。この A2 の arieto<乾燥した>で A1 の誤りが説明できる。

もちろん、オルマンニのコピーも祖本に対する価値を有している。それを損なっている訂正のいくつかは、実際はその転記がそれなりに何らかの正確さがないわけではないことの証明である。例えば、F(98/20-3)「これはシェンと呼ばれ大法廷という意味で・・そして大君の宮廷全体にいる大統治者がいる」、どれにも同じ欠落がある:「これは大法廷と呼ばれ、グラン・カーネの宮廷の中にある」。しかし、A1 は<大>のあとに<そして>を残しており、元の版にはこの欠落はなかったことを示す十分な印しである。A1 「datalpo nero 黒い羊をこれこれ取りなさい」(dal capo nero<頭の黒い>)。A4 と A5 の祖本はこの不可解な言葉を削除していることからして、この誤りはその典拠からすでにあった可能性がある。しかし全体として、とりわけ A2 と較べると A1 は余りにもしばしば恣意的な変形を許している。写字生は余りにもフィレンツェ人で、例えば、

A2に残っている *chanpanella endorate*＜金色に塗られた鐘＞を大目に見ている。これは元の F の *canpanelle endores*＜金色に塗られた鐘＞を反映しているに違いない。いくつかの無意味な注記・解説はもっぱら彼のものである（p.85「各騎士＜ほとんど大部分＞・・・」。P.154「夏用の綺麗な衣装で、＜それらはあの皮から取ったある糸である＞」、同「この川を通過して沢山の商品があらゆるところに向かい、＜また同様に＞この川の支流を通過して」等）。多くの点で、これが提供する読みははっきりと A2 およびこのグループの他の写本より劣っている。これまで折にふれて引用したものに、いくつか他の例を加えよう（ページはオリヴィエーリ版のもの）。

P. 11-2「若者は、他の使者が他所の地から帰り、彼らが使命のほかはその地域の他の話をする事ができず、＜彼つまり君主が彼らを馬鹿にする＞のを見て」－ A2「彼が彼らを馬鹿にする」、A4「彼が彼らを馬鹿にしていた」。P. 127「＜ヴァスプレ＞と呼ばれる硬貨」－ A2・A3・A4「＜アスプレ＞」[以下略]。

A1になく、他の稿本に残っているものをイタリック [＜ ＞内] で示す。

P.39「人は自分自身と荷獣のために＜携行する＞必要がある」。52「水があるところまで一昼夜＜進ま＞なければならない」。115「この場所＜に＞使者がいることをご存じありたい」。129「アムバレック・マンジという＜まっ平らな＞地方」。144「親類縁者はこれを聞くと、霊媒が告げることを全て＜行う＞」。同「命じたことが行われると、＜そして＞彼は言う」。150「象のように大きい＜が、それほど太ってはいない＞雄牛」。154「12日行程の後にシンディフ＜がある＞」。161「グラン・カーネは、バイア・アナサ＜という名の＞重臣を派遣した」。258「我が兄弟アバガは、生涯有したものを＜全て＞保持した」。

5 訳者

以上述べてきたこの訳は、原初の姿に戻して翻訳として判定すれば、全体としてこれまで享けてきたし今も享けている幸運よりも劣る。訳者が、自分の用いた確実に全部揃っていたフランク・イタリア語テキストを移し替えることにおいて一定の能力を有していたことは否定できない。もっぱら歴史的・軍事的性格の章が組織的に省略され、さほど重要でない細部が好ましい強調感でもってほとんど常に犠牲にされている。そして原初の本質的な部分が際立つように残し、時に興味を感じるころではしごくぴったりとした忠実な訳をしている。とりわけ、単なる翻訳者の仕事を遂行するときの冷静な具体性、飾らぬ素直さは誉むべきものである。誇張することなく、過激な調子もなく、勝手な展開も

ない。わずかにいくつかの、解釈的意図からする善意の注記だけが彼のものである。しかし、彼の配慮はあらゆるところで一様というわけではない。例えば、F の第 144 章「揚州」と 145 章「安慶／開封」は哀れな形に要約されている。第 188 章「ケスマコラン」はまさに跳ばされている。要約性は時として行き過ぎで、不明瞭と混乱を引き起こしている。オイル語の不十分な知識は作品を損なっている。時々原文を解読することあるいはそれを正確に訳すことができずして、機械的に書き写すか表面的なイタリア語化に留まっている。次のような語彙に会う：taurizins<タブリーズ人>、cators<ヤマウズラ>、jeneraus<イエネラウス地方>、aspre<銀貨>、jaddis<かつて>、leroiide pelame<毛皮の王>、la sel<塩>、malle<男>、femelle<女>、berci<蘇木>。偽トスカナ語句としては、agli tre gran baroni<三人の重臣に>、quattroventi<80>、fazioni<種類>、gierbellino<クロテン>、laido<乳が腐った>等。意味のずれは数多く、多くの場合極めて重大である [TA－F の順]：

19/39-40：「マンジ王の娘<カシチェーゼ>王女を彼らに託した」－「<コカチン>王女とさらにマンジ王の娘を託した」。22/3-4：「ここには世界で最も美しく良質の<綿>がある」－「ここには世界で最も美しく質のよい<温泉>がある」。23/5-6：「ギリシア人のように小さなく馬>を持っている」－「<髪の毛>」。24/12-4：「この国の山地には<ネストリーニとイアコピーニと呼ばれる>キリスト教徒たちがいる」－「キリスト教徒である<クルドと呼ばれる>人々が住んでいる」。25/9：「この町と<郊外>では世界最良のナツメヤシが取れる」－「この町はすっかり<森>に取り囲まれている」。27/2：「バグダードとモスル<で>起こった奇跡」－「バグダードとモスル<の間で>」[以下略]。

これらの間違いの性質からして、大部分の場合その責をフランス語オリジナルに帰すことはできない。地名の余りにも頻繁な変形、あらゆる数値への常習的な不注意を列挙すれば、このリストはずっと長くなろう。以上のことで、この我々が訳を特徴づけるに充分である。学術的な作品でも、芸術的な作品でもない。多分、読者のためになされたものでもない。おそらく、魅力的な読書の楽しみを増やし引き延ばすために行われたほとんど単なる移し替えであろう。

6 本グループの結論的判断

本書の目的にとって TA は貴重な一テキストである。我々の目には、F とは独立しているがそれに極めて近い第三のフランク・イタリア語稿本を代表する。グレゴワールの改訂版、このトスカナ語訳、そして次の第 4 章で取り上げるヴ

エネト語訳は、F とまさに兄弟的なつながりをもつ唯一の版である。同じ家族の一員であるゆえ、F をマルコのオリジナルから隔てている距離を埋める点では我々の助けとならないが、F の復元、F によって証言されている段階が真正であることの証明とその全体的な複製の役には立つ¹⁰⁾。F と F2^{14*)} の極めて緊密な親戚関係からして、残念ながら TA は、いくつかの崩れがすでにそれらの祖本に遡ることしか示さない場合は数多い。例えば、以下を同じように欠落のある TA の該当個所と対照されたい：F の 70/85-6、86/4、92/88、96/33、99/5、114/9、120/13、153/2。我々が F の 64/2、97/10、139/13、153/18 に施さねばならなかった訂正が、TA の該当個所にもいかに役立つか見られたい。しかし、TA が我々に提供してくれた訂正もかなりある。F のいくつかの欠落は F2 にはなかったにちがいない：例えば、F の 92/10-1、133/6-7、153/13-4、175/39-40、202/29。

1*. Marco Polo, *Il Milione, prima edizione integrale*, a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo Olscki 1928, 'Introduzione: La tradizione manoscritta', Cap.III: La più antica riduzione toscana (TA), pp.LXXX-XCIX. (ベネデット『『マルコ・ポーロ写本』(5)』《大阪国際女子大学紀要》27-1, 2001, pp.151-64,より転載。)

原典からの語句および文の引用には、適宜原文とその和訳もしくはその一方を付けた。引用例を省略した場合は〔以下略〕等と記した。原注は大幅に省略・要約した。＜ ＞内は引用文中イタリック体の個所。[]内は訳者補足、*は訳注。ベネデット校訂版 F の章は原文ではローマ数字で記されているが、ここではアラビア数字で記した。

(原注)

1. 同書に添えられた保護紙中の修道院長 Follini の手書きノートによる。
2. アンブロジーナ図書館目録には T 188 Sup. として、1792 年 Alessandro Bucci による同写本のコピー（紙, 32 x 23, 133 ff）が記載されている（現在不明）。
3. Niccolò を Michele とする誤りを、クルスカ・アカデミーおよび Zeno 同様バルデッリ・ボーニも繰り返している。この誤りはその後の編者 Lazari や Olivieri にも受け継がれている。
4. Parma 1803, t.II, p.300.
5. 本章第 4 節参照。
6. Cfr. A.Marsand, *I manoscritti italiani della R.Biblioteca parigina*, Parigi 1835, I, 460-1; G.Mazzatini, *La Biblioteca dei re d'Aragona in Napoli*, Rocca S.Casciano, 1835, p.99.

7. L.Clasio, *Tullio – Dell’amicizia – Volgarizzamento de sec. XIV*, Firenze 1819, p.16 には、同写本は Benedetto di Banco degli Albizzi によって書かれたとの見解が述べられている。
8. その他、Ms. magliab. II, III, 335, ff.10c-20b; Ms. riccard. 1674, cc.46-54; Ms. palat. 678, cc.26v-33r,等。
9. 以下を対照されたい(原写本－Olivieri版の順、数字は後者のページ): p.9 *vennero novelle* 知らせがく届いた>－*udirono* <聞いた> ; p.9 *diede loro charte* <書いたもの>を彼らに授けた－*lettere*<書簡>。[以下 2 ページにわたって誤りの例が挙げられるが省略する。]
10. Olivieri, *Milione*, p.278 の次の言は理解し難い：「しかしながら、フランス語オリジナルに対するイタリア語訳の<客観的な>価値を何らかの形で度外視することもできない。このことはすでにバルトリが充分に見て取っていたことであり、彼は、『オッティモ』に正確にあるいは十分な形で再現されていないフランス語テキストの個所を、脚注や補遺にほぼ一貫して挙げたのであった」。とすると、TA の価値はその誤りや欠落にあることになる！ TA は客観的な価値を有しており、それは、時として F より正確であり、ただ一つの写本しか今に伝わっていないこのフランス語テキストを訂正することにおいて我々に貢献することにある。

(訳注*)

2. トスカナ大公レオポルド 1 世 (1749 - 92) : 啓蒙君主としてトスカナ地方の近代化に貢献した。1790 年オーストリア皇帝に転出。
3. Ormanni 家はフィレンツェの古い貴族で、ダンテ「神曲」にもその名が登場する。しかし、ニッコロについては何も知られない。
4. Marco Polo, *Milione*, a cura di Valeria Bertolucci Pizzorusso, Milano Adelphi 1975,はこの写本 TA2 からのもの。 *Id.*, a cura di Gabriella Ronci, Milano Mondadori 1982,はその再版。
5. フェルディナンド 1 世 (1431－94) : アラゴン家のナポリ王。シャルル 8 世 (1470 - 98) : フランス王、そのナポリ征服は 1495 年。フェデリーコ 3 世 (1415 - 93) : 1452 年オーストリア皇帝。
6. Cerreto Guidi : フィレンツェ地方の小邑。ポデスタは市外から招聘される行政長官。
7. Cfr. 第 5 章「ピピーノのラテン語版」(拙訳(4) pp.151-70)。
8. 東方行にあたってポーロが世話になったグレゴリウス 10 世、リヨン公会議は 1274 年 5 月、1276 年 1 月アレツォ没。
9. Antonio Pucci (c.1309 - c.1388) : フィレンツェの民衆詩人、他に『百話集』 *Centiloqui* がある。

10. Giovanni Villani : フィレンツェの年代記作者、1348年のペストで死亡、大著『年代記』は当時の歴史の基本文献として知られる。前述プッチの『百話集』はこれを詩文化したものの。
11. 地獄篇第16歌124-6行(Inf.XVI.124-6)。詩の内容はマルコとは直接の関係は何もないが、プッチのこの文以後、この個所はマルコのことを言ったものだとの解釈も現れる。
12. Cfr. 訳注(4)。
13. F126/5 は、ベネデット校訂テキスト F の第126章第5行を指す。(以下同)
14. F2 は、TA (トスカナ語訳) の底本となったと見られるフランク・イタリア語稿本。

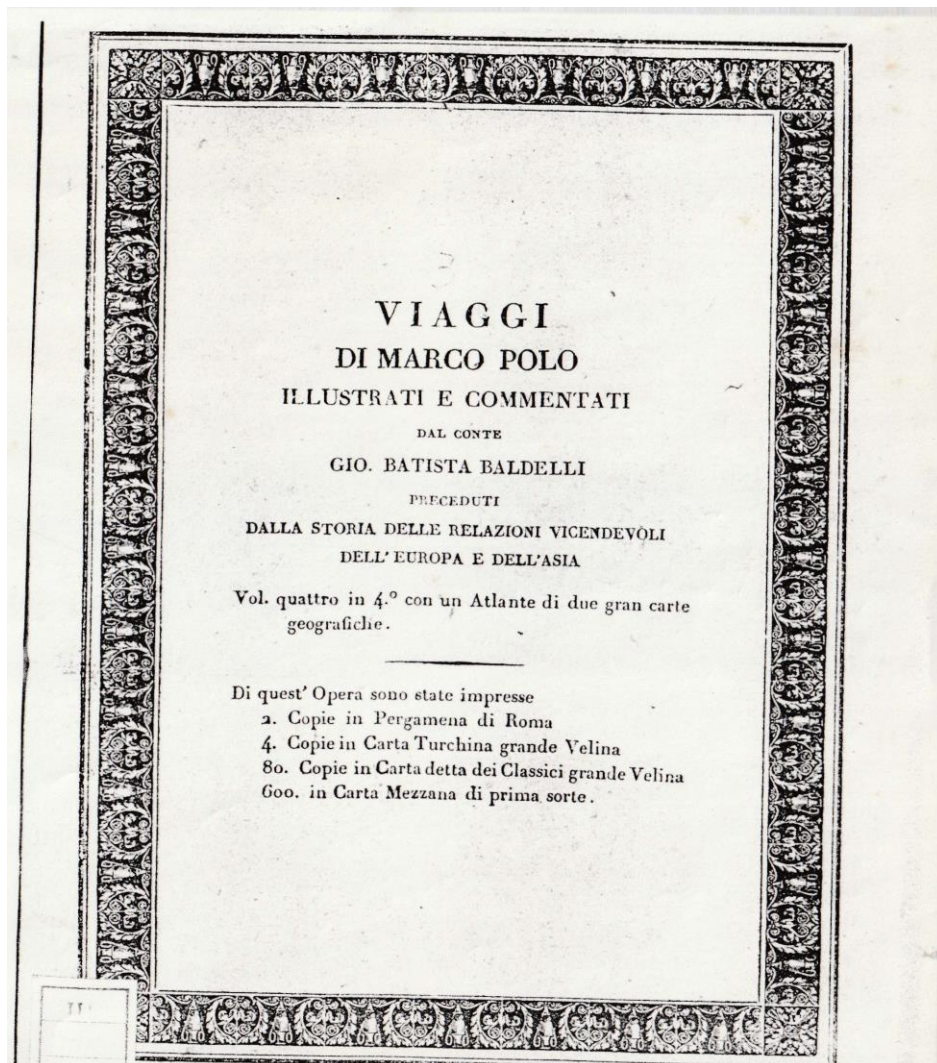


図 6 Baldelli Boni, Firenze, Da' Torchi di Giuseppe Pagani, 1827

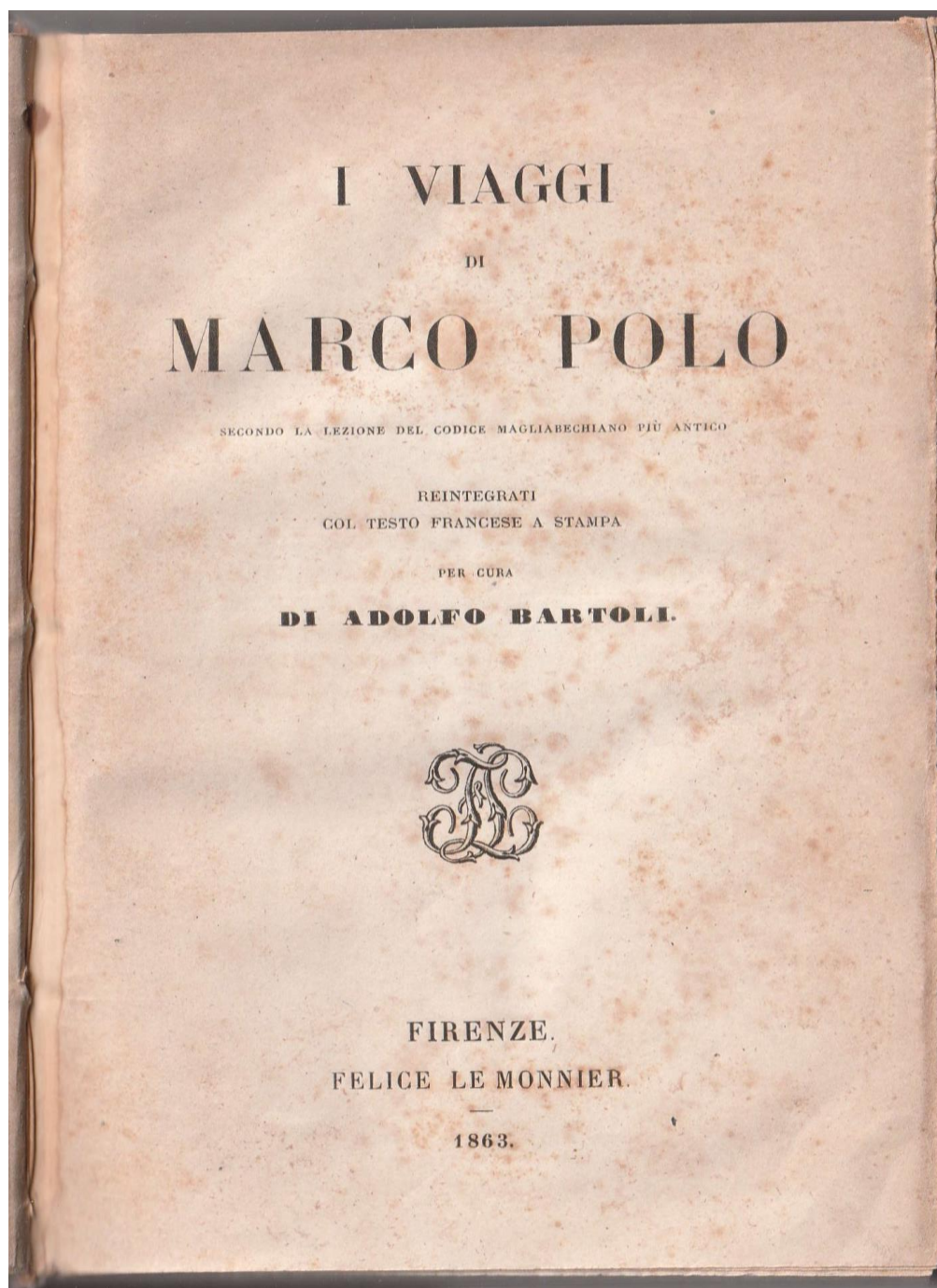


图 7 A. Bartoli, Firenze, Felice le Monnier, 1863.